

I 道徳科における自律した学習者の姿

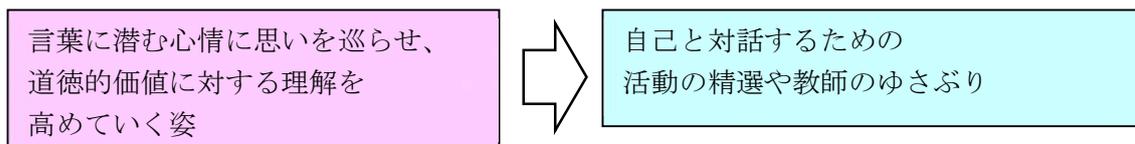
- 教材の登場人物が置かれた状況に没入する姿
- 自らが納得する道徳的価値観を見いだす姿
- 自らの道徳的価値の捉えの幅を広げたり、深めたりする姿

II 授業デザインの取組

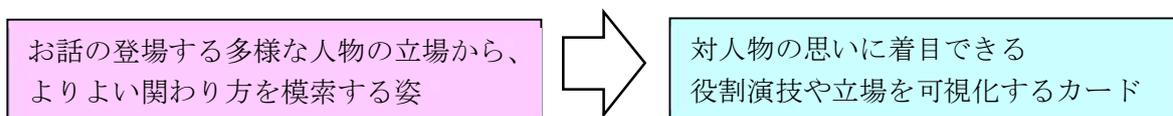
- 登場人物になりきる演劇的手法の活用の仕方や活用する場面を工夫する。
- 複数の立場から内容項目について考え、共有していく活動を設定する。
- 子どもたちの本質に迫る発言や深めたい発言を大切に扱い、効果的な切り返しの発問をする。

III 1年次に生成した仮説

1 成果



雨降りの帰り道、傘を差した少年の後ろから同級生の女の子二人がやってくる。「入れて」と声を掛けたのは、仲良しの友達。もう一人は話したこともない。ここで少年は、仲良しの友達はいいと伝える。そんな教材『帰り道』の少年の一言から、子どもたちはそのときの心情に思いを馳せた。三人が一つの傘に入ると、せっかく傘を持ってきた自分が濡れてしまうかもしれない。やや迷って、仲良しの子には入ってもいいと言った。子どもたちは自分と重ねながら少年のよさをあげる。その考えを教師が拾い上げ、揺さぶる。すると、「のりこちゃんはいいいけど」の裏返しは、「ひろみちゃんはだめということ」であることを考え始めた子どもがいた。少年の不公平さやその不快さが広がっていった。「悪口言っちゃったかな」や「悪いと思っているのにその気持ちを我慢できなかった。明日謝ろうかな。」と子どもたちの中で少年の発言を再考する姿が見られた。「書く」という自分とじっくり向き合う時間の中で、道徳的価値についての考えを深めていった。



いろんな人の立場に立って考えられるようになってほしい。その教師の願いから、少年を中心とした「帰り道」を、他の人物にも注目できるように発問や活動、教材提示の仕方が工夫された。自分がしたこと気付いた少年がその後どんな行動をするのか考えるために三人一組になって役割演技を取り入れた。子どもたちはここで二人の女の子の心情に注目した。どうして「いいよ」と言われたのに、私と一緒に帰ることを選んだのだろう。傘に入っているのは、どうして私だけなのだろう。三人の思いが浮き出てくるほど、どうすればみんなにとってよいか考えることの難しさに気付くことができるようになった。発問にこたえる子どもたちは、誰の立場で考えたか意思表示するカードを持っていた。子どもたちも友達のカードの色に関心を示す。同じ色を繋げながら、違う色を結びながら教師が指名していくことで、子どもたちの考えが深まっていった。

2 課題

「傘、もう一つ持っているからいいよ」役割演技で少年役をした子どもは、もう一本の傘を二人の女の子に渡した。「もしかしたら男の子は好きな女の子と一緒に帰りたかったのかも」子どもの想像はどんどん広がる。しかし、話し合わせたかったのは如何ともし難いこの状況で、どうすれば公平な行動がなされるのかである。考えを広げながらも、条件を絞り、育てたい価値に焦点を当てる必要があった。どんなジレンマが生じているのか把握することで、子どもたちがより没頭して取り組む役割演技にできた。演技の前後を大切にしていきたい。

2年道徳 誰かを演じて、自分に出会う

指導者：佐藤 咲紀

研究の実践

1 主題「だれにたいしても ～『雨ふり』～」【公正、公平、社会正義】

2 授業の実際

(1) 登場人物になりきることで自分を見つめる役割演技

「どんな友だちに対しても同じように接しているか」というアンケートでは、「まあまあ」と答える子どもが多かった。理由として、「仲のよい友だちでも、けんかの後は緊張してしまう」「初めて話す人には難しい」など、状況によって態度が揺れる実態が共有された。

本教材「雨ふり」では、主人公のふみおが傘をさしているところ、傘を持っていないのりことひろみが入れてほしいと走ってきて、仲がよくないひろみを入れるべきか悩み、のりこは自分だけなら入れてもらわなくていいとひろみと共に走っていく。そして、残されたふみおが「えっ」ではなく「はっ」としたことに着目し、ふみおの心情の変化を丁寧に追った。授業冒頭から黒板前に集まり、自然と近くの友達と語り合う雰囲気生まれた。子どもたちは、登場人物の気持ちに自我関与し、真剣に向き合おうとしていた。そして、ふみおの気付きについて、悪いことを言ってしまったと気付いた、えこひいきしたと気付いた、と話す子どもたち。ここで私は、嫌だとは言っていないふみおの気持ちに寄り添うように、「のりこちゃんは『いい』って言っているよ」「別にいいんじゃない？」と問い掛けてみた。A児は、「だめだよ、何、別にいいじゃんって」と興奮気味に反論する。「仲間外れにしているからだめ」と別の子どもが補足した。さらに、「けんかしていたらどうか」「仲良くない人とは…」と葛藤が生まれ、悩み始めた。表情が変わった。アンケートでの自分の回答を思い返す子どももいた。真剣そのものだった。「のりこちゃんはいいいけど」の発言について、B児は「ひろみちゃんは大めって言ってるみたい」と話した。誰に対しても公平に接することの難しさや、相手の気持ちをよく考えることの大切さに気付く姿が見られた。

その後ふみおはどうするか、役割演技で考えた。のりことひろみが屋根の下で雨宿りをしているところにふみおが追いかけるという設定だ。「待ってくれよ。まだだめとは言っていないよ。」とふみお役の子どもが声を掛ける。「入れてあげる」との言葉に、ひろみ役の子どもは「さっき入れてくれなかったのに何で？」と返す。「いやあ…ごめんね…」ともじもじ濁すふみお役。どうするかと息を凝らして見守る他の子どもたち。すると、「まあいっか」とのりこ役のB児が応じた。「まあいっか、結局入れてくれるし」との言葉に、3人が笑顔になった。「まあいっか」は、日頃仲良しの友達との間でけんかの絶えないB児に私が伝えていた“気持ちを切り替える言葉”であり、それを役の中で実践したことに成長を感じた。役割演技は、登場人物になりきることで、普段できない行動を試す場としても有効であると実感した。



(2) 没頭を生むための発問の工夫

道徳における問題解決に没頭している子どもの姿とは、登場人物の状況を自分事として捉え、感じたことや考えたことについて本音で語り合う姿だろうと考えた。いかに子どもたちが自分の言葉で語り、考え、今の自分と向き合うか。「雨ふり」は、2Bの子どもたちが「ふみおが悪い」と「自分もやっしまいそう」の間で揺れ動き、真剣に考えることができる教材だと感じた。教師の発問が子どもの思考を深める決め手となる。授業では、子どもの発言に対して即興的に切り返したり、あえて揺さぶりをかけたりすることを意識した。例えば、「傘には2人とも入れなくてはいけない」という意見に対しては、「でも、ふみおたちは仲よしじゃないんだよね」と問い返し、状況の複雑さに気付かせた。また、「どっちもだめって言ってないんだよ。ふみおは優しいよね？」と投げ掛けることで、子どもたちは「でも…」と自分の中の違和感を言葉にしようとし、友達と真剣に話し合う姿が見られた。

さらに、ふみおの気付きについて考える場面では、A児が「やっちゃった」と叫び、「まずい！まずい！やっちゃった！」と繰り返した。私は、「何かをやっちゃったことに気付いたんだね」と受け止めるだけでそれ以上深くは掘り下げなかった。その後の個の時間につなげたかったからだ。もしA児に「何をやっちゃったの？」とそこでそのまま問い返したらどうなっていただろうか。その場で学級全体に共有され理解が深まったかもしれない。しかし一方で、他の子どもの思考が固定され、自由な発想が妨げられた可能性もある。道徳の授業において、子どもの反応に瞬時に応じることの難しさと重要性を改めて感じた。

今回の実践を通して、子どもが没頭する道徳授業をつくるためには、教師が子どもの言葉を丁寧に受け止めつつ、価値の揺れを促す発問を意図的に行うことが不可欠であると感じた。今後は、子どもの内面の動きをよりの確に捉え、思考の深まりにつながる発問の質を更に高めていきたい。